

Title	戦略経営における環境適応 - 食品企業の戦略・組織分析 -
Sub Title	
Author	飯田泰一(Iida, Taiichi) 関本昌秀
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1980
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001980-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名	飯 田 泰 一	主査	関 本 昌 秀	教授
	(サントリー株式会社)	副査	石 田 英 夫	教授
所属ゼミナール	奥 村 昭 博 研		奥 村 昭 博	助教授

戦略経営における環境適応 — 食品企業の戦略・組織分析 —

組織が、環境に適応すべく活動することにより、成果があがるとは、組織が戦略を通して、環境と内部特性間とが適合することである。これらの要因の適合した組み合わせを複合バランスという。そこでコンティンジェンシー理論と、アンゾフの戦略的プロフィールのアイデアを使い食品業界数社のヒストリカルな環境適合をみてきた。成功している業界は、企業はオープン・システムという観点にたち、環境に適合すべくうまく複合バランスをとっている。これがアンゾフ仮説でいう適性プロフィールである。ある状況での環境適合を「静態的適合関係」と呼称し、新たな環境への適合に到る過程を「動態的發展過程」の中で、環境への働きかけの力となる組織資源の蓄積をベースに、リーダーシップと組織風土がうまく組み合わせられた結果としての複合バランスが、クローズアップされてくる。

企業の成果要因として ① 環境適合 ② 複合バランスの重要性を認識すべきであるが、このような状態に導くところの誘引力は、さらに重要である。その誘引力とは、組織のトップのリーダーシップであり、企業活動のヴァイタリティーの源となる組織風土である。

今までの経営は、コンピューターシステム、研究開発技術設備投資等ビジブルなそしてスキルを中心とした量的な側面での研究が中心としてなされてきた。これからは、組織の内部成長衝動をうまく誘引する力となる、リーダーシップ、組織風土という質的な側面の重要性が強調されなければならない。これが、私のいうところの「乱気流下での経営は、量から質への転換」ということである。